東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　36：101～111，2010

教科書語彙リストのあり方について
― 新中級教材開発に向けた予備調査 ―

柳澤絵美・工藤嘉名子
（2009. 10. 31 受）

【キーワード】　教科書語彙リスト、語彙学習、中級学習者、学習行動、教材開発

0　はじめに

留学生向け日本語教科書には、本文の語彙リストが付いているのが一般的である。しかし、一口に「語彙リスト」と言っても、その内容や形式は実に様々である。見出し語の数、対訳の有無、対訳の言語、用法説明の有無、語彙リストの位置など、教科書の数だけバラエティーがあると言っても過言ではない。

一方、学習者の語彙学習行動も多様である。本文読解の授業を例にとってみても、語彙リストを何度も参照しながら読解を進めていく者もいれば、語彙リストに対訳があるにも関わらず電子辞書で意味を確認する者もいる。また、語句の意味を何語でメモするか、用法や関連語をメモするか、学習した語彙を単語ノートなどに整理するかどうかといった点においても、学習スタイルは異なる。殊に、電子辞書が普及し、インターネット辞書の活用が盛んになった昨今、学習者の語彙学習行動は年々変化しているように思われる。

東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下「センター」）では、現在、新たな中級教材（以下「新中級」）を開発中であるが、そのプロトタイプ的教材を作成する過程で、本文の語彙リストをどうするのか、ひいては「新中級」の語彙指導をどう考えるのかといった議論が生じた。筆者らは、語彙指導の方針を決定し、語彙リストをはじめとした語彙教材を具体化するためには、既存の中級教科書の語彙リストを比較分析することと、語彙リストを用いた教材学習における学習者の学習行動や学習意識を明らかにする必要があるのではないかと考えた。

そこで、本稿では、まず、近年刊行された中級教材数点について、教科書本文の語彙リストの比較分析を行う。次に、学習者の学習行動および学習意識を明らかにすることを目的とした調査の結果について報告したい。

1　既存の中級教材語彙リストの比較

中級レベルの教科書の場合、読解のための本文があり、本文の語彙リストがあるというのが一般的である。しかし、個々の語彙リストの内容・形式などは、教科書によって大きく異なる。語彙リストの内容や形式を決定するものとしては、本文読解のための語彙リストを「与えるか与えないか（語彙リストの有無）」、与えるとすれば「何を与えるか（見出し語の選定）」、「どう与えるか（見出し語の形式、付加情報など）」といった方針が考えられる。さらに、それらの方針の基には、「だれのための語彙リストか（対象者）」「何のための語彙リストか（学習目標・目的）」「どのような学習・習得を目指すのか（言語教育・習得観）」といった、教育方針や理念があるはずである（図1）。

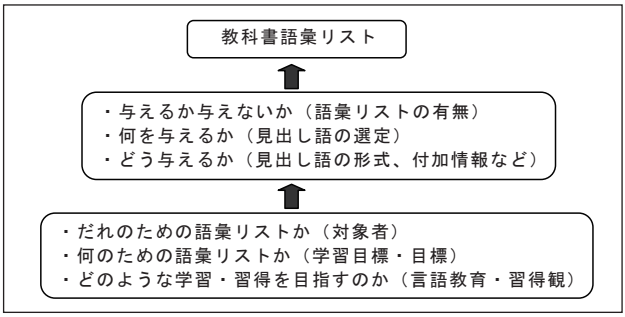

図1　教科書語彙リストの背景にある基本的な考え方

こうした基本的な方針や考え方に基づき教科書語彙リストが作成されているという前提のもと、本稿では、近年刊行された中級教科書の中から数点を取り上げ、語彙リストの内容や形式について比較分析を行った。分析の対象とした教科書は、表1に示す5点である。いずれも2000年以降に出版された中級総合教材[(1)]で、教科書の各課には読解本文がある。なお、表中の「略称」とは、本稿で便宜的に用いる各教科書の略称である。

表1　比較分析の対象とした教科書

書　名	略称	出版社	出版年
①日本語中級 J501 英語版・改訂版	J501	スリーエーネットワーク	2001
②テーマ別中級から学ぶ日本語・改訂版	テーマ別	研究社	2003
③ニューアプローチ中級日本語 基礎編・改訂版	基礎編	日本語研究社	2003
④学ぼう！にほんご 中級	学ぼう	専門教育出版	2007
⑤日本語5つのとびら 中級編	とびら	凡人社	2008

上記５点の教科書の本文語彙リストについて、①本文語彙リストの有無、②見出し語の数（総語数および各課平均語数）、③見出し語の選定基準、④漢字語彙の読み・ルビの有無、⑤対訳の有無および対訳の言語、⑥関連語（類義語や対義語など）の有無、⑦用法（助詞や活用など）の有無という７つの点から分析した。なお、分析の対象とした語彙リストは読解用本文の語彙リストのみで、教科書の練習問題やタスクなどの語彙リストは対象から外した。表２に分析の結果を示す。

表２　語彙リストの分析結果

	J501	テーマ別	基礎編	学ぼう	とびら
①リストの有無	○	○	○	○	○
②見出し語の総数（各課平均語数）	約 700 語（約 70 語）	約 1,400 語（約 55 語）	約 500 語（約 25 語）	約 350 語（約 18 語）	約 100 語（約 15 語）
③選定基準	記述無し	『初歩』以外の新出語	『みんなの』以外の新出語	『学ぼう』初級・初中級以外の新出語	記述無し[2]
④漢字読みの有無	○（ルビ）	○（ルビ）	○（ルビ）	○（ルビ）	○（読み欄）
⑤対訳の有無［言語］	○［英語］	－	－	－	○［英語］
⑥関連語の有無	＊リスト外	－	＊リスト外	－	－
⑦用法の有無	－	－	○（一部の動詞のみ）	－	－

注１）表中の「○」は「有り」、「－」は無を示す
注２）『初歩』：『日本語初歩』、『みんなの』：『みんなの日本語初級』

まず、語彙リストの有無を見ると、対象とした教科書全てに本文の語彙リストがついていることから、中級教科書の場合、読解本文の語彙リストは必要だとする考え方がやはり一般的であることがうかがえる。しかし、見出し語として何を選定するかといった選定基準は教科書によって異なり、実際の見出し語の数にも大きな開きがあることがわかる。

次に、語彙リストの見出し語に付加される情報という点から分析結果を見てみると、必須の情報は見出し語の漢字の読み方のみであることがわかる。また、語の対訳については、対訳があるものは『J501』と『とびら』の２点で、ほかは対訳がない。対訳を与えないということは、語句の意味は学習者が辞書などを使用して自分で調べてくることを前提としているのではないかと推測される。語彙リストに漢字の読み方が付されているのも、単に読み方を示すだけでなく、辞書を引く際の手がかり

になるようにという配慮の表れではないかと思われる。さらに、関連語や用法に関する情報についても、語彙リストには入れないという方針の教科書が多い。

以上の分析から、中級教科書の語彙リストは、本文読解に必要最低限の情報として、見出し語（新出語）と漢字の読みを与えるものであり、語の意味や用法は学習者が自分で調べるか、授業の中で獲得するものであるという仮説を立てることができるであろう。しかし、与えられた語彙リストをもとに、学習者がどのように語の意味や用法を学習するのかについては、実際の学習行動や学習意識の分析が必要である。次節に、中級学習者を対象に行った、語彙リストの使用実態に関する予備調査について報告する。

2　調査の目的と方法

2.1　目的

本調査の目的は、中級レベルの学習者による教材語彙リストの使用実態を明らかにし、現在センターで開発中の「新中級」の語彙リストおよび語彙指導の方向性を考察することである。具体的には、以下の2点を目的とする。

①教師観察および学習者へのインタビュー調査により、語彙リストを用いた教材学習における学習者の学習行動（辞書引き行動、語彙の意味確認方法など）の実態を明らかにする。

②インタビュー調査により、語彙学習および語彙リストに対する学習者の意識を明らかにする。

2.2　対象

本調査の対象は、2009年度春学期全学日本語プログラム[(3)]「中級総合日本語401」の受講者である。語彙リストを用いた学習行動調査では受講者全14名中13名から調査協力の承諾が得られた。学習行動調査の裏づけのためのフォローアップインタビューには、上述の13名中、5名から協力が得られた。なお、データ収集および研究への利用については、学習者の同意を得て行った。調査協力者の出身地域の内訳を表3に示す。

表3　調査協力者

国・地域	人数
中国（内モンゴル）	4
イギリス	2
アメリカ	2
フィリピン	1
オーストラリア	1
イタリア	1
インド	1
シリア	1

2.3　調査で用いた語彙リストの概要

本調査では、語彙リストを用いた学習行動を分析するために、「中級総合日本語401」で用いた教材の語彙をリストアップした「ことばの学習シート」を作成した。語彙リストの体裁（例）を図２に示す。

1－1　国土の成り立ち

《ことばの学習シート》

●授業の前に意味を調べたり、授業で習ったりしたことを書くのに使ってください。

※もう意味を知っていることばは、□にチェック（✓）するだけでいいです。
※「＊」のことばは、おぼえて使えるようになってください。
※「メモ」のところには、自分が大事だと思ったことを自由に書いてください。

✓	＊	ことば	読み方	意味	メモ
□	＊	国土	こくど		
□		成り立ち	なりたち		
□		ユーラシア大陸	ユーラシアたいりく		
□		北海道	ほっかいどう	※日本の地名	
□	＊	約～	やく～		
□	＊	これら			
□		北東	ほくとう		
□		南西	なんせい		
□	＊	～から～にかけて			
□		細長い	ほそながい		
□		弓	ゆみ		
□	＊	（～が）並ぶ	（～が）ならぶ		
□					
□					

図２：「ことばの学習シート」の体裁

語彙リストの作成にあたっては、次のような考え方を前提とした。まず、「学習者が辞書を引いて学ぶことも学習の一部である」と考えた。これは、中級になると、授業以外でも未習語を自分で調べる機会が増え、辞書を引く習慣と意味を検索する力が必要になるためである。ただし、辞書を引いて意味を調べるといっても、その全てを学生に任せるわけではない。「辞書を引くことを通して、語彙学習が効果的に行えるような語彙リスト」が必要であると考えた。さらに、本文の意味理解のた

めだけでなく、「その語彙の運用力を伸ばしていくこと」も視野に入れて語彙リストを作成した。

語彙の選定基準は、日本語能力試験出題基準2級以上の語彙（2級、1級、級外）および、3級、4級の語彙のうち漢字の出題基準において2級以上の漢字を含むものである[(4)]。なお、ここでの「語彙」には、「～にかけて」「～につれて」などの複合助詞も含まれる。

語彙の表示方法は、漢字表記がある語は漢字で書き、読み方をひらがなで示した。品詞については明記していないが、動詞には（　）に自他や用法を示す助詞の情報も付け加えた。また、固有名詞には「日本の地名」や「法律の名前」のように、あらかじめ日本語で意味を与えた。

図2のリストの左端にある□は、学習者が意味を調べる際に、既知の語にチェックを入れるための欄である。チェックを入れることで、学習者は未知の語と既知の語を意識化することができ、教師もリストアップした語の中にどの程度既知の語が含まれているか把握できるようにした。

「＊」は、学習者の負担を減らす目的で「覚えて使えるようになってほしい語」として全体の約35～40％につけた。これは、語彙リストには少ない課で74語、多い課では111語がリストアップされており、意味を調べる際に負担になるのではないかという現場の教師の指摘があったためである。「＊」の語の選定基準は、日本語能力試験出題基準2級以上で使用頻度が高いものである。

メモ欄は、用法や類義語・反義語、例文などの関連情報を書き込むためのスペースとして設けた。また、リストの最後に空欄の行を設け、リスト以外の語について自由に書き込みができるようにした。

学習者は「ことばの学習シート」を用い、宿題としてことばの意味を調べてきた。なお、シートの使い方については、以下のような指示を与えた。

①「ことばの学習シート」は、自身の語彙学習のためのものであり、教師に勉強していることを見せるためのものではない。
②知っている語については、□にチェックを入れるだけでいい。
③必要だと思ったことは何でも自由に書き込んでいい。
④記入する際の言語は何語でもいい。

2.4　データ収集

本調査では、学習者が宿題および授業中の加筆・修正を経て書き込みをした「こ

とばの学習シート」を回収し、学習行動のデータを収集した。また、学期終了後に、語彙学習に対する学習者の意識を調べるためのフォローアップインタビューも実施した。

3　結果と考察

3.1　学習行動の分析

学習者から提出された「ことばの学習シート」を見ると、□にチェックが書かれている語が多く、本調査で用いたリストには既知の語が多く含まれていたことが分かった。このことが影響したためか、インタビュー調査で意味を調べる宿題の負担について聞いたところ、かかった時間は平均で20分程度であり、負担になったと答えた学習者はいなかった。

語彙リストのことばの意味は予習の段階でほとんど調べることができていた。しかし、辞書では調べられなかったり、意味が捉えにくかったと報告された語もいくつかあった[(5)]。これらの語については、授業中に教師に質問して確認する学習者が多かった。本文で使われている意味を正確に把握するには、日本人の友達に質問するよりも教師に聞くのが確実だと考えていたようである。

「ことばの学習シート」の記入には、学習者の母語が用いられていることが多かった。インタビュー調査の結果、学習者は意味を調べる際に、電子辞書やインターネット辞書を使っており、その種類は、日英、日中、日伊のような日本語から他の言語に翻訳するものであることが分かった。辞書を引いた結果をそのまま書き写したため、記入に母語が使われていたと思われる。上級になれば、国語辞典を引いて日本語で単語の意味を理解することができるであろうが、中級では、既習の文型や語彙が限られているため、まだ母語に頼るところが大きいと考えられる。ただし、授業で説明を受けた部分については、日本語で書かれていた。

「＊」をつけた語は、授業の中で重点的に説明することはなかったが、定期試験の語彙の問題は「＊」を付したものの中からのみ出題した。「ことばの学習シート」を見ると、「＊」をつけた語に特に注目して意味を書いたり、追加情報を書き入れた様子はなかった。インタビュー調査で「＊」をつけた語について聞いたところ、試験勉強には役立ったが、語彙の学習という意味では特に意識をしておらず、どの語も同じように大切だと思って勉強したという意見が多かった。この結果から、授業で提示される語彙については、学習者が「この語は重要」、「この語は重要ではない」といった基準をもとに学習を進めることは少なく、教師が語彙リスト内の語に優先順

位をつけて指導をすることは、語彙学習においてあまり意味がないことが分かった。

メモ欄はほとんど使用されておらず、付け足したい情報があった場合には、語彙リストの最後にある空欄の行に記入されていた。

以上の分析から、学習行動において、次のような傾向が見られた。

①辞書を引いて意味を調べる作業の負担は少なかった。

②ほとんどの語については、意味が調べられていたが、調べられなかった語については、授業中に教師に確認する学習者が多かった。

③ことばの意味を調べるのには電子辞書やインターネット辞書が用いられていた。

④語彙の意味の記述には学習者の母語が用いられていた。

⑤「＊」がついた語（教師が優先順位をつけたもの）は特に注目されていなかった。

3.2　語彙学習に対する学習者の意識

ここでは、フォローアップインタビューから明らかになった学習者の語彙学習に対する意識について報告する。

漢字の読み方がひらがなで示してあった点については、意味を調べる際にとても役に立ったという意見が多かった。これは、漢字の読み方を自分で調べるのは難しく、時間もかかってしまうためであった。また、普段、未習語を耳にした際にも濁点や特殊拍の有無が聞き取れなかったために、辞書で意味が調べられず苦労したという声も聞かれた。このことから、語彙リストに読み方を与えておくことは、学習者の負担を減らし、効率よく語彙学習を行う助けになると言えるだろう。

2.3で触れたように、本調査の語彙リストには動詞と共に助詞も示されていたが、これも非常に役に立ったという評価を得た。その理由は、自動詞と他動詞の区別ができ、作文を書いたり話したりする際の参考になるためであった。適切な助詞を用いた日本語の産出は、どのレベルの学習者にとっても課題となるため、助詞を示した語彙リストは、学習者にとって大きな学習支援となり、その後の運用にもつながっていくと言えるだろう。

語彙リストをどのように利用していたかについて聞いたところ、主に、本文読解におけることばの意味や漢字の読み方の確認と試験勉強に使われていた。また、一部の学習者からは、作文を書く際などに語彙リストに適当な語があったことを思い出して確認したり、生活の中で学習した語を意識して使ったという声も聞かれた。語彙リストのことばは、基本的には授業に関係することに使われていたが、授業以外の場面でも運用につながっていく可能性が示唆された。

今回、語彙が運用に結びついていった理由のひとつは、ある話題（「地理」、「教育」など）において、よく使われる語彙がまとまってリストアップされていたためだと考えられる。橋本・山内（2008）でも、語彙リストは学習者の言語行動と密接に関わるものであり、収録されている語を用いて「まとまった話」ができるようなものでなければならない。そのためには、ある話題を支える語がグルーピングされた語彙リストが必要であると述べている。このように、語彙がトピックごとにまとまっていることは、運用の手助けをする働きがあると思われる。

本調査では、学習者が自分で意味を調べるタイプの語彙リストを用いたが、語彙リストの中には、ことばだけがリストアップされているものや対訳がついているもの、日本語で説明が書かれているものなどがある。インタビュー調査において、どういった語彙リストが一番勉強になると思うか聞いたところ、本調査で用いたような自分で意味を調べるものという意見が多かった。学習者は、自分で意味を調べるという作業を通して、語彙がより効果的に定着すると考えていた。

以上のフォローアップインタビューから明らかになったことをまとめると、次のとおりである。

①漢字語に読み方をつけておくと辞書が引きやすい。

②動詞に助詞をつけることで、運用に結び付けやすくなる。

③ある話題に関わる語彙をまとめて掲載することで、記憶の検索や文の産出の手助けとなる。

④学習者は自分で意味を調べる語彙リストが最も勉強になると考えている。

4　まとめ

本調査の結果から、中級以降の語彙学習では、語彙に関する情報を全て与えてしまうのではなく、学習者が辞書を引いて自分で語彙を学んでいくことの重要性が示唆された。そのためには、対訳や意味の記述、リスト内の語への優先順位付けなどは、あまり有効ではないと言えるだろう。語彙リストには、意味を調べる際の支援となる漢字の読み方と、運用に結びつけるための助詞の情報を載せる程度にとどめ、学習者の自律的な学習を支援していくことが大切だと考えられる。

ただし、やはり語彙学習の全てを学習者に任せるのではなく、自律学習と語彙を運用につなげていくための支援をしていく必要がある。支援のひとつとして、辞書の引き方の指導があげられる。国語辞典、日本語から他の言語（またはその逆）への翻訳のほかに、漢和辞典の引き方も指導しておくと有効と言えよう。ことばの意

味調べには、紙媒体の辞書や電子辞書に加え、最近ではインターネット辞書も活用されるようになってきた。『とびら』では、インターネット辞書の1つとして、「チュウ太の道具箱」(http://language.tiu.ac.jp/tools.html) を紹介し、語彙学習をサポートしている。このように、語彙学習に有効なインターネット辞書やWebサイトなどを紹介し、語彙学習の手立てを増やしていくことも学習者への支援となるだろう。

運用面においては、多義語や意味が捉えにくい語については、授業の中で使い方を確認する練習問題を取り入れることなどが必要であろう。更に、学習した語彙を積極的に使えるような作文課題や口頭発表課題を組み込んでいくことも重要だと考えられる。

語彙リストの作成においては、橋本・山内 (2008) で述べられているように、「文」の生成に必要な統語的情報を掲載し、「談話・段落」レベルの「まとまった話」ができるようにすることを考えておく必要がある。そのためには、ある話題に関連した語彙をグループとして提示していくことも有効と言えよう。

今後は、本調査で得られた知見をどのように教材開発に結びつけ、具体化していくかを課題とし、検討を続けていきたい。

注

(1) 「総合教科書」という用語は、「凡人社日本語教材リスト」の分類名にしたがった。また、教科書によっては対象とする学習者のレベル設定が多少異なるが、教科書に「中級」と記載されているものを分析の対象とした。

(2) 語彙リストの語彙は「本文に出てくる新しいことば」(『とびら』p. ii) となっているが、具体的な選定基準については言及されていない。

(3) 東京外国語大学に在籍する非正規留学生 (一部正規生を含む) のための日本語プログラム

(4) 語彙のレベル判定には、川村よし子氏 (東京国際大学) が開発したレベル判定ツール「チュウ太の道具箱」(http://language.tiu.ac.jp/tools.html) を用いた。ただし、判定ツールでは判定できなかった語については、『改訂・品詞別・A～D別1万語語彙分類集』(専門教育出版1998) に基づき、再判定を行った。

(5) 学習者が辞書で調べられなかった語は、「なだらかな」、「青々とした」などのような辞書の見出し語の形と異なる語や、「これら」、「十数～」などのような接辞を含む語であった。

参考文献

荒井礼子・太田純子・亀田美保・木川和子・桑原直子・長田龍典・松田浩志（2003）『テーマ別中級から学ぶ日本語（改訂版）』研究社

小柳昇（2003）『ニューアプローチ中級日本語　基礎編（改訂版）』日本語研究社

土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・石沢弘子（2001）『日本語中級 J501　英語版（改訂版）』スリーエーネットワーク

日本語教育教材開発委員会（2007）『学ぼう！にほんご　中級』専門教育出版

橋本直幸・山内博之（2008）「日本語教育のための語彙リストの作成」『日本語学』Vol.27-10, pp.50-58.

立命館アジア太平洋大学（2008）『日本語５つのとびら　中級編』凡人社